

191 肝シンチグラムのパターン及び肝血流指数と組織像

浅原 朗, 本間芳文, 大浅勇一, 立花 享 (中央鉄道病院 放) 上山 洋, 南部勝司 (中央鉄道病院 消内) 上田英雄 (中央鉄道病院)

肝シンチグラムの診断にあたって、肝の占拠性病変や全体の形態学的所見は診断し得ても、その病理学的診断は経験的なものから想像の域を脱し得ない。その意味からシンチグラム及びヘパトグラムの検査を行なった症例中、肝生検、手術、剖検により組織学的診断が確定した症例を抽出し、Retrospective に肝シンチグラムを再検討し、肝イメージと肝組織像との関係、肝血流指数と病態との関係から Routine に行われる核医学的検査により肝の病態をより細かく組織病理学的に観察するための検討を行なった。対象は過去2年間に肝シンチグラム及びヘパトグラムを同時に検査した365症例中短期日以内に組織診断が確定した121例であり、その内訳は、急性肝炎18例、慢性活動性肝炎24例、慢性非活動性肝炎18例、脂肪肝5例、甲型肝炎5例、乙型肝炎19例、肝腫瘍24例、胆汁流障害8例である。これらの成績は疾患によるシンチグラムのパターンにかなり特異なものがあり分類も可能である。組織型についても差異を認め、核医学検査のみでもその成績から組織型分類の可能性が示唆されていた。

193 肝占拠性病変有無に関する肝シンチグラム false positive 例の検討

久保敦司, 高木八重子 (慶大、放)
松本 徹, 飯沼 武 (放医研、臨)

肝シンチグラムの臨床的有効度についての検討が日本アイソトープ協会核医学開発委員会のエフィカシー1委員会において実施されているが、今回我々は肝占拠性病変の有無に関する肝シンチグラム false positive 例について、当委員会のデータをもとに検討を加えた。

剖検、手術等で確定診断のついた406例の内、肝占拠性病変の無かった症例は282例であるが、その内11名の肝シンチグラム読影医の半数以上が肝占拠性病変有または有の疑と読影した症例は24例で、ここではこれらを false positive 症例とした (false positive ratio 9%, specificity 91%)。24例の false positive 例の内10例は肝硬変症であり、それらの多くが肝シンチグラム上肝の変形が強いものであった。その他の false positive 例としては胆のう腫大による胆のう圧痕像、肝外腫瘍による肝圧排像、肝内胆管拡張像などを肝占拠性病変と誤診したものであるが、これらの症例については、読影結果に読影医間のバラツキが大きかった。

192 肝シンチグラムの臨床的有効度の定量的評価 - false positive について -

勝山直文, 川上憲司 (慈大、放) 町田喜久雄 (東大、放) 久保敦司, 高木八重子 (慶大、放) 飯沼 武, 館野之男, 穴戸文男, 松本 徹 (放医研), 中島哲夫 (埼玉がんセンター、放) 村田啓, 飯尾正宏 (都立養育院、核放) 山崎統四郎 (東女医大、放)

肝にSOLのないと確認された277例の肝シンチグラムについて false positive に関し検討することを目的とする。各シンチグラムについて、11人の医師がスコアリング (SOL無: 0、無の疑: 1、有の疑: 2、有: 3) を行い評価した。277例全例についての平均 score は 0.45 であった。平均 score が 1.5 以上、すなわち SOL の有る確率が無い確率より大きい症例は 22 例で 7.9% であった。疾患を正常、びまん性肝疾患、肝硬変の群に分類して、全体の平均 score を出したところ、それぞれ 0.36、0.40、0.81 となった。また各疾患群で平均 score が 1.5 以上の症例は正常群 147 例中 6 例 (4.5%)、びまん性群 74 例中 5 例 (6.8%)、肝硬変群 56 例中 11 例 (19.6%) で、肝硬変の存在により false positive は著明に増加した。これらの症例について F・P の因子を検討する予定である。

194 肝占拠性病変有無に関する肝シンチグラム false negative 例の検討

高木八重子, 久保敦司 (慶大、放)
松本 徹, 飯沼 武 (放医研、臨)

日本アイソトープ協会エフィカシー1委員会による肝シンチグラムの臨床的有効度の定量的評価のため、8施設から提出された406例の確定診断の明らかな肝シンチグラムと、11名の医師による全症例の読影結果を利用して、肝占拠性病変の false negative 例について検討した。

406例のうち肝占拠性病変は124例であった。これらの読影診断を肝占拠性病変有 (4点)、有の疑 (3点)、無の疑 (2点)、無 (1点) としてこの点数×提出施設以外の読影医師数の総和を医師数で除した平均値が2.5点以下を示したものを false negative 例とすると肝占拠性病変124例中23例 (18.5%) が false negative 例であり sensitivity は 81.5% であった。

疾患は転移性肝腫瘍が23例と多かった。単発病変は右葉6、左葉1の計7例で、このうち5例は病変の大きさが3cm以下であった。多発病変16例のうち半数の8例では病変が無数に存在した。なお肝占拠性病変有無に関する accuracy は 88.4% であった。